

鹿児島県出水水平野におけるツル類の 基礎調査 第3報

標識ツル類の観察資料 1.

安部 直哉*¹・内田 康夫*²・藤村 仁*³

Studies of the Cranes in Izumi, Kagoshima,
Japan. 3.

The Observations of Ringed Cranes (1)

Naoya Abe*¹, Yasuo Uchida*² and Hitoshi Hujimura*³

序

鹿児島県出水地方で越冬するツル類の標識調査は、環境庁委託・鳥類標識事業の一部として、山階鳥類研究所・標識研究室によって1979年から実施されている。同室によって捕獲・標識されたツル類と防鳥網にかかったり、弱っていて保護され、後に標識放鳥されたツル類の種類、個体数、幼成別などの資料は同室の各年度報告書に発表されている(山階鳥類研究所・標識室, 1983, 1984, 1985, 1986)。

特にここ数年、越冬地での標識個体数の増加によって標識鳥の観察記録が多くなり、一方、ソ連、中国、北朝鮮、韓国との間に標識個体を含むツル類の生息状況の情報交換も始まっている。

標識ツル類に関する正確な情報の集積によって、たとえば、繁殖開始年齢、年ごとの番関係や家族構成あるいは繁殖状況、年齢別の年生残率、越冬群の幼鳥成鳥の割合と全越冬数との関係、繁殖地と越冬地の関係などツル類の生態の解明に不可欠の知見が得られるであろう。

国立科学博物館附属自然教育園が担当部課となって、昭和60年度より「鹿児島県に渡来するツル類の調査」(千羽, 1986)が開始された。この報文は本調査の第1年度調査中に得た標識ツル類の観察資料をまとめたものである。上述の「ツル類の調査」としては、特に標識ツル類を対象とした調査項目は設けられていない。しかし、標識ツル類の発見や標識個体のその後の追跡調査などは、これまで、ツル監視員・又野末春氏や一般鳥類観察者に主にまかせたような状態であったので、本調査中に標識ツル類の発見や観察にも努めた。

標識ツル類を対象とした調査時間が限られていたので、得られた資料も不十分なものではあったが、報告することにした。協力いただいた又野末春氏、調査に参加された方々、ナベヅルA53の写真を撮っていただ

*¹ 国立科学博物館附属自然教育園(非常勤). Institute for Nature Study, National Science Museum

*² 東京都練馬区中村1-11-2, Nakamura 1-11-2, Nerima, Tokyo

*³ 東京都中野区中野6-8-15, Nakano 6-8-15, Nakano, Tokyo

いた叶内拓哉氏, さらに, 標識実施者である山階鳥類研究所標識研究室の方々にお礼申し上げる。

調 査 方 法

調査期間 1985年秋から1986年春にかけてのツル類の越冬期(以下, 1985—1986年期と記す)中, (1)1985年10月22—30日, (2)1985年11月21—28日, (3)1985年12月17—24日, (4)1986年1月25—31日, (5)1986年2月20—26日に前述の「ツル類の調査」を行った。この間, ツル類の全越冬数調査, 分散状態調査などと併行して標識ツル類の発見, 家族構成などを調べた。

用語説明 (1)幼鳥と成鳥: 生後, 初めての越冬期をすごしている個体を幼鳥, それより高齢の個体はすべて成鳥として, 亜成鳥という分類はこの報文では用いなかった。(2)金属脚環: 一般に鳥類標識調査で用いられている, 個体識別番号が刻印されている金属製の脚環を金属脚環と略記した。

標識ツル類に関する基礎資料 この報文で用いた, 標識時の基礎資料, たとえば, 各個体の標識年月日, 標識時の幼成別, 家族関係などは, 前述の山階鳥研・標識室の年度報告によるものである。

調 査 結 果

この項では, 1985—1986年期に観察されている各標識個体と同期に標識された個体を最初に列記し, 次に, われわれ調査班による各標識鳥の観察結果を示し, 各標識個体を概説し, 一部の個体では生息状況や行動上の特徴などを記した。この項で記した内容は, 初年度調査すなわち1985—1986年期中の観察結果が主であるが, 一部の個体については1986—1987年期の状況も少し記述した。

本報を執筆の時点で, 1985—1986年期に観察された標識鳥の多くが再渡来していることが明らかになっているが, 1986—1987年期の渡来状況については上に断わった個体以外では記述しなかった。それらの資料は次年度の報告にまとめる予定である。

観察されている標識個体

初めに, 1985—1986年期における観察個体と同期に新たに標識された個体を列記すると次の通りである(山階鳥類研究所・標識室, 1986, 又野末春氏よりの私信)。以下, 野外における個体識別用の色脚環の色・記号・番号で各標識個体を表した。

ナベヅル——(1)と(2)の合計は29個体。

(1)前年期までに出水で標識された個体で, 1985—1986年期に観察された個体。

橙色10, 14, 25,

黄色J 09, J 11, J 21, J 22, J 23, J 24, J 25, J 26, J 28, J 29, J 30, J 31, J 36, J 37, J 40, J 41, J 42, J 43, J 44, J 45, J 49, J 50。計25個体。

(2)ソ連で標識され, 観察された個体。

白色A 50, A 51, A 52, A 53。計4個体。

(3)1985—1986年期に標識されたもの18個体。

黄色J 52, J 53, J 56—J 69, J 79。野外識別用の色脚環は付けずに, 金属脚環とその外側に白色補助環を付けた1羽。

マナヅル——(1)と(2)の合計は13個体。

(1)同上。

橙色12, 15, 22。

黄色J 04, J 05, J 16, J 17, J 19, J 32, J 33。計10個体。

(2)同上。

黄色060。白色A18, A19。計3個体。

(3)同上, 次の2個体。

黄色J 54, J 55。

上にあげた山階鳥研・標識研究室がまとめた記録のなかには、われわれ調査班による1986年1月末までの記録も一部含まれていると思われるが、この他にナベヅル・橙色2とマナヅル黄色J 14とJ 15が観察されている。以下、各標識鳥について概説した。

ナベヅル

橙色2 橙色の野外識別用脚環は、1個所にしか標識番号が刻印されていないので、この脚環付の個体を発見しても、多くの場合、標識番号の読み取りにかなりの時間を必要とする（黄色脚環と白色脚環では、2個所に標識番号が印されているので、読み取りは容易である）。

右脚に黄色の脚環を付けている、この個体と推察されるナベヅルは（後述の標識個体、橙色10, 14, 25では左脚にこれらの脚環が付いている）、11, 12, 1月の調査中に観察できたが、標識番号を読み取れなかった。1986年2月24日、西干拓地でこの個体を発見し、初めて標識番号を明らかにできた。橙色2は幼鳥1羽をつれた3羽の家族で、その番の相手、幼鳥とも標識脚環はなかった。

なお、この個体は1986—1987年期にも渡来している。この個体は1979年生まれで、生年の明らかな標識ツル類中、最高齢である。

橙色10 又野氏により1985年10月30日に初めて観察された。以後、12月21日に観察したが、大群内に入っていて、家族構成は明らかにできなかった。

橙色14 この個体についても、標識番号の読み取りに多くの時間を要し、家族構成は明らかにできなかった。

橙色25 西干拓地、遊休地内で何度か観察されたが、大群内にいることが多く、家族構成は不明。

黄色J 09, J 36 前述の山階鳥研・標識室による観察鳥のまとめに記されている個体のうち、われわれ調査班が観察できなかったのは、ナベヅルJ 09, J 36, J 26とマナヅルJ 33の4個体であった。

J 09, J 10, J 36, J 37の標識時、1984—1985年期、1985—1986年期の家族構成は同室の報告書（1985, 1986）に記されている（ただし、1985年報告書では、雌と推定されるJ 09は雄J 37を伴い4羽の家族、と記されているが、J 37は誤りで、J 36と思われる）。

なお、1986—1987年期には、1986年11月8日、東干拓地でJ 09とJ 36が番で1羽の幼鳥をつれた3羽の家族で観察されている。

黄色J 11 この個体は前越冬期にJ 12と番で、1羽の幼鳥（J 13）と3羽で標識されている。J 11を発見した際に、J 12を捜したが発見できなかった。J 11は気が荒く、付近のナベヅルにつかかるのが何度か観察された。番関係は不明であるが、幼鳥はつれていないと思われた。

黄色J 21 1985年11月23日、米ノ津川左岸の農耕地域で初めて観察され、脚環のない鳥と番の2羽の家族であった。その後の調査期には、上述の地域に一度も観察されなかった。

なお、山階鳥研・標識室による標識時の記録(同室, 1985)では、黄色J21の脚環は右脚に付いていると記されているが、このJ21の脚環は左脚に付いている。さらに、後述の黄色J23も、右脚ではなく、左脚に付いている。

黄色J22 1985年11月25日、遊休地内で初めて観察。J22の脚環が付いている右脚の具合が悪いのか、右脚を体の方に引っこめて休むことが多かった。この時には、5羽の成鳥と一緒に、付近には幼鳥はいなかった。1986年1月29日、遊休地内で観察した際にも、家族構成は明らかにできなかった。

黄色J23 脚環のない番の相手と1羽の幼鳥をつれた3羽の家族であった。

黄色J24 脚環のない番の相手と2羽の家族、1985年12月20日には、高尾野町御岳東方の農耕地で初めて観察されたが、以後、この地域には現れなかった。

黄色J25 この個体は、今期の第1回調査中、1985年10月25日に渡来した。以後、何度も観察された。1984年生まれで、今越冬期間中には番になっていなかった。

黄色J26 この個体をわれわれ調査班は観察できなかった。なお、1986—1987年期には、1987年1月に観察されている。

黄色J28 脚環のない相手と番で、2羽の家族。野田川右岸、高尾野町下高下の農耕地で1985年12月20日に初めて観察。1986年2月22日には高尾野町麓西方の農耕地で観察され、以後、遊休地で何度か観察された。

黄色J29, J30 番で2羽の幼鳥をつれた4羽の家族であった。J29は雌、J30が雄であろう。西干拓地と遊休地内でよく観察された。

黄色J31 遊休地内でよく観察された。1984年生まれで、今越冬期には番になっていなかった。

黄色J37 遊休地内でよく観察された。1984年生まれで、番にはなっていないようであった。

黄色J40, J41 前期同様にこの2羽は番で2羽の幼鳥をつれた4羽の家族であった。遊休地、東西両干拓地でよく観察された(図1)。

黄色J42, J43 又野氏によると、1985年10月20日に渡来している。両鳥ともに、遊休地、東西両干拓地でよく観察された。J42、J43は前述のJ40、J41の子供(1984年生まれ)で、今越冬期にはJ42、J43とも番になっていなかった。

黄色J44 山階鳥研・標識室(1985, 1986)によると、1985年1月26日にこの個体(J44)は番の相手(J45)と幼鳥(J46)と同時に捕獲され、標識されている。1985—1986年期にはJ44、J45が越冬していたが、J44とJ45は番ではなかった。J44は、脚環のない相手と番の2羽家族で、蕨島小学校西方の農耕地でよく観察された。

なお、J44は、出水地方で越冬するナベヅルとしては例の少ない、虹彩が黄色である。

黄色J45 遊休地、西干拓地で大群中に観察され、家族構成は明らかにできなかった。しかし、この個体の近くにJ44が見られることはなかった。

黄色J49 山階鳥研・標識室(1985)の標識鳥リストには登録されていない個体であった。同室に問い合わせたところ、この個体は1985年1月28日に保護後、3月2日に放鳥された成鳥であろうという。同室(1986)によれば、J49の脚環が左脚に、右脚には金属脚環とその外側に白色の補助環が付いていると記されている。しかし、右脚の金属脚環の外側の白色補助環は落ちたのか、付いていなかった。

この個体は、脚環のない番の相手と2羽の家族で、野田川と高尾野川の河口部より国道3号線につなげた新設の直線道路わきの農耕地、特に野田川寄りに日中は定住していた。J49は雌であろう。

黄色J50 脚環のない番の相手と2羽の家族。1985年11月より古浜内の一定の農耕地に日中は定住していた。J50は雌であろう(図2)。

白色A50 又野氏によれば、1985年10月22日に初めて観察されている。成鳥羽の個体で、東干拓地で何度も



図 3. ナベヅル白色A53

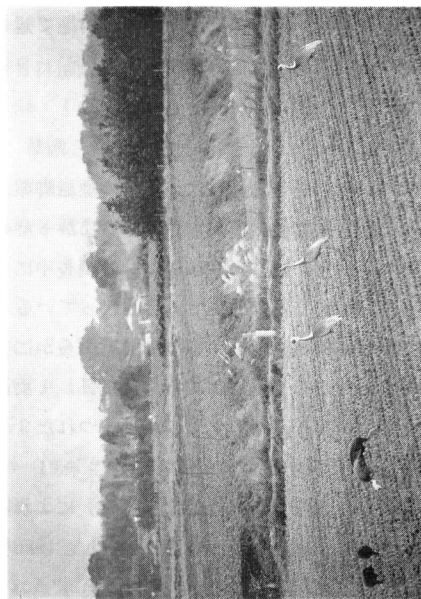


図 4. マナヅル黄色J17の番と1羽の幼鳥
(右端の鳥がJ17)



図 1. ナベヅル黄色J40, J41の番と2羽の幼鳥の
うちの1羽

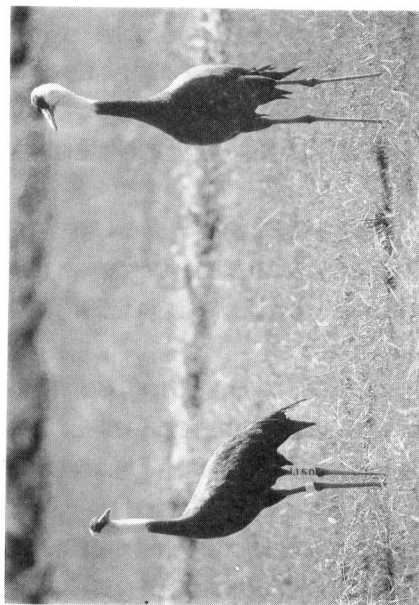


図 2. ナベヅル黄色J50の番

観察されたが、家族構成は明らかにできなかった。

白色A 51 これも成鳥羽の個体である。観察回数が少なく、家族構成は明らかにできなかった。

白色A 52 幼鳥。又野氏によれば、1985年11月10日にA53と共に初めて観察されている。

白色A 53 東干拓地、遊休地、上水流の農耕地で観察された。成鳥羽ではあるが、番にはなっていない（図3）。

マナヅル

橙色15 ナベヅルの場合と同様に、橙色の標識脚環は、その標識番号の読み取りに多くの時間を要し、この個体についても家族構成は明らかにできなかった。

橙色16 1985年11月、12月、1986年1月の調査中に1日ずつ遊休地内で観察され、1月26日の観察では、幼鳥をつれていないことは確実で、番になっているとも見えなかった。

橙色22 この個体についても、家族構成を明らかにできなかった。

黄色J 04, J 05 この2羽は1984年1月18日、1羽の幼鳥をつれた番として捕獲、標識されている。1985年10月27日には、東干拓地で1羽の幼鳥をつれた3羽の家族として渡来していた。以後、何度も観察され、日中は主に西干拓地で生活していた。

黄色J 14, J 15 山階鳥研・標識室（1986）によれば、この2羽は1984—1985年期、1985—1986年期とも観察されていないことになっている。しかし、1986年2月20日、西干拓地において、1羽の幼鳥をつれた3羽の家族として観察されている。

なお、この2羽は1986—1987年期にも観察されている。

黄色J 16 この個体は1983年生れて、第3回冬羽に相当する1985—1986年期の越冬期には、その養羽はそれより高齢と推察される個体の養羽より短かった。1985年11月、12月には、やはり養羽の短い、脚環のない個体（J16は、この個体より小形なので、雌かと思われた）と一緒にいるところが何度か観察され、番になりかけている状態が見られた。

このJ16は、繁殖地への渡りの途中、1986年3月15—21日まで、和歌山県日高郡美浜町に1羽で出現している（千羽・安部、1987）。

黄色J 17 この個体は中国で発見され、繁殖地が確かめられている。詳しくは、尾崎（1986）が紹介している。

1985—1986年期には、脚環のない番の相手と1羽の幼鳥の3羽家族であった。1985年12月20日、分散調査中に出水市唐笠木の農耕地で初めて観察され、以後、毎月の分散調査日に同じ所で観察された。遊休地に帰っている場合には、遊休地区の東南隅に何度か観察された。体の大きさや行動から雄であろう（図4。J17は右端）。

黄色J 19 この個体は、1984年1月25日にJ17とJ18の番の2羽の幼鳥のうちの1羽として同時に捕獲、標識されている。前出のJ16と同じ1983年生まれのものJ19は、脚環のない個体と番になっていた。この個体よりJ19の方が、体が小さく、J19は雌と思われた。J19とその番の相手とも若齢鳥に特徴的な羽毛を残していた。

黄色J 32 1985年11月24日に遊休地内で観察されただけで、家族構成は明らかにできなかった。

黄色J 33 この個体をわれわれ調査班は観察できなかった。なお、1986—1987年期には観察されている。

黄色060 山階鳥研・標識室（1985, 1986）、尾崎（1986）によると、この個体は、ソ連でコウノトリ用の脚環を付けたものである。右脚に小型の黄色060の脚環が付いていたが、左脚には脚環が付いていなかった。1984年生まれのもので、番にはなっていない。

白色A18, A19 これらもソ連で標識された個体である。今越冬期をとおしてA18とA19は何度も一緒に観察され、番と思われたが、幼鳥はつれていなかった。

1985—1986年期の標識鳥

マナヅル、ナベヅルの今越冬期における標識個体の番号は前述の通りである。このうち、ナベヅルの黄色J52, J53, J57, J58, J59, J60, J62, J63, J64, J65, J66とマナヅルの黄色J54, J55が山階鳥研・標識室によって1986年1月20, 22, 23日に捕獲、標識されている(同室, 1986)。これ以外の4羽のナベヅルは保護されて後に標識された個体である。

これら合計17羽のうち、ナベヅルのJ52, J53, J66の3羽を除く14羽が以後観察された。

ナベヅル

野外識別用の脚環を付けていない個体 この鳥は保護後に、金属脚環の外側に白色補助環を付けて1985年12月20日に放鳥された。それ以後、遊休地内で何度も観察されたが、番になっている様子は見られなかった。

黄色J52, J53 番で捕獲、標識されたこの2羽を1985—1986年期には観察できなかった。しかし1986—1987年期には1986年11月9日にこの番を初めて観察した。

黄色J56 1985年1月20日、1羽で捕獲、標識されたこの幼鳥は、その後1月末には鶴見亭の南方から東南の農耕地でよく観察され、びっこを引き、親からはぐれた迷子状態で生活していた。2月の調査中には、この鳥を発見できなかった。

1986—1987年期には、この個体は極めて特異な羽毛で渡来している。つまり、虹彩は暗赤色になっているが、背面や雨覆の多くの羽毛が第1回冬羽の幼羽のまま、正常の第2回冬羽とは異なり、換羽の進行が著しくおこなわれている。前冬に捕獲、標識後、親鳥とはぐれて異常な生活をおこなったために、換羽がおこなわれているのかもしれない。1986—1987年期は1987年1月現在、番にはなっていない。

黄色J57, J58 J57は成鳥、J58はその1羽の幼鳥として1985年1月22日に捕獲、標識されている。標識後、1985年1月末には、J58は親鳥とはぐれ、遊休地内をびっこを引いて歩きまわっていた。1986年2月20日には、J57と脚環のない番の相手とJ58は3羽の家族として正常に行動している様子が遊休地内で観察された。2月24日にもこの3羽は同地で正常に生活していた。

なお、このJ58も1986—1987年期にすでに渡来しており、J58は通常の第2回冬羽(広義の成鳥羽)になっている。

黄色J59, J60, J62, J63 J59とJ60が番でJ62とJ63はその幼鳥。4羽の家族として1986年1月22日に捕獲、標識されている。

1986年1月29日には、幼鳥J63は親鳥からはぐれ、遊休地内をさまよい歩きまわっていた。この個体は、背中への換羽がかなり進んだ幼鳥であった。1986年2月20, 25日には、J63も親鳥と一緒に、標識を付けている4羽の家族が西干拓地内で観察された。なお、1986年2月25日には、親鳥からはぐれた幼鳥1羽(脚環はない)がこの家族と一緒にしようとする行動を示していたが、J59がこの幼鳥を追い払っていた。J59はよく鳴き、攻撃的で雄のようであった。

黄色J61 この個体は、1985年11月12日に渡来途中で弱り、福岡県嘉穂郡碓井で保護され、出水に運ばれて保護飼育後に11月28日に放鳥された成鳥である。1986年2月24日には、脚環を付けていない成鳥と幼鳥1羽の3羽の家族として西干拓地で正常に行動していた(千羽・安部, 1986, 1987)。

黄色J64, J65, J66 山階鳥研・標識室(1986)によると、この3羽は、J64とJ65が番でJ66はその幼

鳥, 3羽の家族として1986年1月23日に捕獲, 標識されたという。

J 64とJ 65の番は1986年2月24日に西干拓地で観察された。しかし, その幼鳥というJ 66は付近に見られず, この番は脚環の付いていない幼鳥1羽と3羽の家族として行動していた。J 66は, 一度も観察できなかった。

黄色 J 67, J 68, J 69, J 79 これら4羽はいずれも幼鳥で, 1986年1月末から2月下旬の間に保護され, 標識放鳥された。どの個体についても, もとの親鳥と一緒にあったかどうかを明らかにできなかった。

マナヅル

黄色 J 54, J 55 番のこの2羽は西干拓地と遊休地内で何度も観察された。

結 び

ハクチョウ類, ガン類など大型鳥類の場合と同様に, ツル類についても, 野外観察によって比較的容易に個体識別が可能な標識の使用は, その生態一般の研究に非常に有効である。ハクチョウ類に使用されている野外識別用の頸環は, 標識後の破損, 脱落がきわめてはやく, 長命のハクチョウ類の標識としては充分なものでなかった(安部, 未発表)。ツル類に用いられている野外識別用の標識が, ツル類の寿命に比較して, どれぐらい長くもつかという点は今のところ不明であるが, ハクチョウ類の野外識別用の標識にくらべ, 現在のところ, 脱落が少なく, 標識ツルの観察による興味ある知見が集まりつつある。

ツル類の標識実施者である山階鳥類研究所標識研究室と他のツル類調査者との間の情報交換が, 現状より一層緊密になることを期待したい。

文 献

- 千羽晋示. 1986. 鹿兒島県に渡来するツル類の調査. 自然教育園報告, 17: 27.
- 千羽晋示・安部直哉. 1986. ツル類の渡来状況アンケート調査(略題). 私たちの自然, 299: 18—19.
- 千羽晋示・安部直哉. 1987. 鹿兒島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第2報. ツル類の生息状況に関するアンケート調査(昭和60年度). 自然教育園報告, 18(印刷中).
- 尾崎清明. 1986. 足環からわかった出水のツルの故郷. アニマ, 167: 36—39.
- 山階鳥類研究所・標識研究室. 1983. 昭和57年度・鳥類観測ステーション報告, 256—257.
- . 1984. 昭和58年度・同上報告, 221—224.
- . 1985. 昭和59年度・同上報告, 200—206.
- . 1986. 昭和60年度・同上報告, 159—163.